

JASO発 暮らしつづける街へ (Part 2) <第 35 回>

能登半島地震視察手記

(株)漆企画設計 代表取締役
白石健次

はじめに

令和6年1月1日に発生した能登半島地震の被害状況視察に耐震総合安全機構 (JASO) 構造担当の一員として参加した。小生は新潟県糸魚川市で生まれ育ったこともあり、小学生時代には新潟地震を経験していることや、今回の地震では石川県や富山県だけでなく新潟県も地震や津波被害を受けたことも周知の事実である。生まれ故郷に近い自然の美しい能登半島には一度も訪れたことがないことに猛省しているところである。

さて、今回の地震被害視察に参加した大きな理由は、災害の状況視察ではなく、いかにして減災、あるいは防災のために役立つ手法があるかを考察するためと、地域ぐるみ耐震化研究会として活動した10年間の経験が能登半島地震被害の復興に役立つために必要なことを探ることや、今後、起こり得るとされる東南海地震や思ってもいない地域での災害に対する被害を少なくする手段を探りたいと思う。

輪島市までの道のり

令和6年4月1日は能登半島地震後3か月となる日であり、意味深い日でもある。埼玉を出発したときは早朝から大雨に見舞われ、旅程にはかなり心配であったが金沢方面に向かって行くうちに青空が広がってきた。北陸新幹線の糸魚川駅に着いたときは久しぶりに帰ってきたなと感じられ懐かしさを覚えた。

終点の金沢駅に9時45分頃到着し、視察団のみんな

と開札付近で合流しバスに乗り込んだ。金沢駅周辺では地震被害も見当たらなかったが細部は不明である。バスは市街地を過ぎ海岸方面に向かい、「のと里山海道」にて一路輪島市に向かった。

羽咋市を過ぎ志賀町を通過し山間に入ったときである。屋根の棟にブルーシートが架けられた民家が確認できた。



中島町や穴水長の山林地帯では地震による土砂の崩落があちらこちらで見受けられたが杉や竹の倒木が多かったことに疑問を感じた。のちに地元の人に聞いて分かったことだが、限界集落や高齢化により山林の整備ができないうえに老廃したことが原因だと知った。



「のと里山海道」の穴水 I, C を降り一般道を走ったが、地震による陥没などで道路は大きな段差が生じてバスがガタン・ガタンと上下に大きく振動した。地震発生時は車や自転車の移動は全くできなかったところか徒歩の移動も不可能ではなかったのではないかと想像できた。

輪島市内

ようやく、輪島市の中心部にある道の駅「輪島」に到

着した。ここは、かつて「のと鉄道七尾線」の終着駅であった旧輪島駅とのこと。近くのステーションホテルも地震の被害に遭い休館中であった。建物は大破には見えないが、ホテル入口付近が崩れ落ち地震の大きさが見て取れた。



トイレ休憩をすませ輪島朝市の近くにある輪島港に到着し変わり果てた街並みが目に飛び込んできた。海は物静かで、大地震を想像することができない姿であった。その後は徒歩で7階建ての商業施設に向かったが、報道などで観ているよりはるかに想像に絶する建物が目の前にあったことや、周辺の道路や歩道にも地震による大きな爪痕が残っていたが、少ないものの地域の人々や車が往来していたので、やっとではあるが復旧のために動きだしているなと感じた。その足で、かつては人通りも多く盛んであったと思われる「輪島朝市」に向かった。いまだに焼け焦げた匂いがする中を進んだ。自分は糸魚川出身と言うこともあり近年に発生した「糸魚川大火災」を思い出し、当時の風向きはどうだったのか、あるいは十分な消化活動ができたのかと…



4月1日は能登地震発生から3か月で、付近には複数の報道関係者が現状を伝えようと取材をしていたが、「輪島朝市」の復興にはかなりの時間がかかると感じられた。

その後、市内を歩き地震被害の状況を見て回ったがどのようなメカニズムで建物や工作物が破壊されたのか想像ができなかった。

歴史的建造物の被害視察

輪島市を後にして国道249号線を南下し「禅の里」にある曹洞宗大本山・総持寺祖院に向かった。ちょうどそこから大粒の雨が空から降りだし、次の視察に影響がありはしないかと心配したが、総持寺祖院に到着したころはすっかりと晴れ上がり雨具の心配は無くなった。

総持寺祖院とは何かと思っ調べてところ、かつて曹洞宗の大本山「総持寺」で明治31年に大火で見舞われ、その後横浜市鶴見に移転遷祖され、以降能登の総持寺は「総持寺祖院」と呼ばれるようになったとのこと。2007年3月にも能登半島地震で大きな被害に遭ったようである。



数度の地震を経験し数棟の建物が被害あるいは倒壊したようだが修復が進められており、登録有形文化財にも指定されている重要な建造物である。

次に訪れたところは「黒島重要伝統的建造物群保存地区」であるが、ほとんどの建造物が倒壊し当時の面影を残していない。訪れた時が、ちょうど3か月前の午後4時10分ころだったので、輪島市長からの一斉放送で一分間の「黙とう」宣言が行われJASO視察団全員で黙とうを行った。



さらに海岸線を南下し海上の隆起などを確認し1日目の帰路についた。

珠洲市視察

4月2日は朝から曇り空で日の光は地上に届いていないがそれほど寒さは感じられなかった。昨日の輪島市よりさらに北に位置する珠洲市へ向かった。道路状況は昨日とあまり変化は無かったが、一番驚いたのは「のと里山海道」の途中から下り一方通行で凸凹道の連続だった。途中には地震被害に遭ったと思われる車がひび割れた道に置き去りにされていた。一番ひどかったのは盛り土で形成された部分の殆どが崩れていた。どうも原因は山水の滞水で土が流動したのではないかとこのことである。後に整備された部分は軽微な被害で済んだようである。



ようやく珠洲市中心部に到着し珠洲市立宝立(ほうりゅう)小中学校に到着した。その後徒歩で鵜飼漁港までを視察したが、輪島市を上回る被害状況であると感じたことや地域の人々がま

ばらで道路の信号も消えたままになっていた。さらに海岸に足を進めたが船が打ち上げられたままになっており堤防の一部が崩壊し5mほど移動していた。また、海辺に建つ鉄筋コンクリート造の建物の窓が破壊されていた。まさに津波の破壊力であると実感した。東日



本大震災時の津波は10m以上だったが、この場所は4～5mの津波が押し寄せたようだ。

もう少し足を進め、見付公園にある見附島(軍艦島)を視察し昼食を取り、2年前に移住してきた方の語り部により当時の状況が少しだけ理解できた。



宝立町の被害状況を車窓から確認し視察最後となる正院町に向かったが、この地の被害状況も地震の力の凄さをまざまざと感じさせられた。

終わりに

東日本大震災の視察(STREC)に次いで能登半島地震の被災地を視察して感じたことは、日本の国では何処にいても絶対に安全な場所の一つも無いと思う。いつ、どこで、どのような災害が発生し被害に遭遇するかは誰にも分からないと言うことである。自然の力の大きさが計り知れないことは理解できても自分に降りかかってきたときの対応や対処が何処まで冷静に判断し対応ができるかと考えさせられる視察であったことは言うまでもない。

日本をはじめ諸外国においても地球全体が活動期に遭遇している今、どうしても避けられない災害とどう向き合って何ができるかを真摯な気持ちで立ち向かっていかなくてならないと感じた。

以下に視察団参加者を示す。(参加者名簿順による)

- 安達 和男(団長) ■河野 進(副団長)
- 白石 健次 ■篠崎 玲紀 ■石橋 謙介
- 鈴木 昭夫 ■藤本 健 ■近藤 一郎
- 鯨井 勇 ■早川 太史 ■伊藤 昌志
- 大谷 孝介 ■三島 直人 ■今井 章晴
- 三木 剛 ■宮城 秋治

(文責 白石健次)